

[グローバルに活躍する]

③ ゼロからの国際会議の立ち上げ



大川 猛 | 宇都宮大学

APRIS2018 とは何か

情報技術に関する国際会議・ワークショップは数多く開催されている。私が普段活動しているコンピュータサイエンス (CS) 領域の界限でも、いわゆるトップカンファレンスと呼ばれる国際会議や、それに付随するワークショップ、その他独立した国際会議・ワークショップが開催されている。そのような中、なぜ新しくゼロから国際会議 APRIS2018 を立ち上げる必要があったのだろうか？ 本稿では、APRIS2018 の企画がどのように始まり、進んでいったかを振り返りたい。

APRIS2018 (表-1) は本会組込みシステム研究会 (SIGEMB) の運営委員、在タイ日本企業である豊田通商ネクスティエレクトロニクス・タイランド社 (NETH) 関係者、および Prince of Songkla University (PSU) 関係者を中心とした3者の共同運営で開催した。会議は4日間で、前半2日間はキーノート講演・招待講演・研究報告等からなる本会議、後半2日間は学生や若手技術者がモデルベース設計・チーム開発手法を学びながらロボットコン

テストを行うという内容であった。

APRIS2018 の企画は SIGEMB 活動の国際展開のための布石として2017年12月に東海大学高輪キャンパスで開催された組込みシステムワークショップ (ESW2017) で始まった。

ESW2017 では井倉将実氏 (当時の役職=豊田通商デンソータイランド (株)・技術取締役) にインターネット経由でのビデオチャット講演をしていただいた。井倉氏はタイで精力的に自動車関連の情報システム開発ビジネスを展開されている方である。講演はタイを始めとした東南アジアにおいて、自動車関連・組込みシステム分野が大変活気あるという内容であった。熱い雰囲気が伝わり、参加者にとって大変刺激的な内容であった。さらに PSU と連携して車載・組込み・FPGA (Field Programmable Gate Array) 分野の技術者を育成することについての紹介があった。さらに、SIGEMB のメンバがかかわるロボットコンテストをタイで開催したい、という井倉氏の展望が語られた。これに対して講演後、SIGEMB のメンバで話し合ったところ、ロボットコンテストを通じて国際交流を体験し、国際会議として発表もできる場を持つことがよいのではないかと議論があり、APRIS2018 の企画を立ち上げることとなった。

調査と企画

上記の縁があり、タイの方々と共同で APRIS2018 の企画を行うことになった。しかし、タイで学会を開催するには何から始めたらよいのか分からず模索

表-1 APRIS2018 の概要

会議名称	Asia Pacific Conference on Robot IoT System Development and Platform 2018 (APRIS2018)
日程・プログラム	2018年10月30日～11月2日 1～2日目：招待講演・研究発表 3～4日目：ロボットコンテスト
場所	タイ・ブーケット Prince of Songkla University Phuket Campus
講演言語	英語
講演数	口頭発表28件、ポスター8件
参加人数	105人 (日本から41名が渡航)

することとなった。

まずはパートナーとなる相手国タイでよくある学会開催のスタイルについて調査を行った。分かったことは、タイでは日本の本会に相当するような国内学会はあるが、研究会・国内シンポジウム・国際会議のような仕組みは有していないということである。そこで、タイにおいては下記のようなスタイルの国際会議を行っている。

1. 大学が国際会議を主催する
2. 近隣国の相手大学が参加する
3. 大手学会（IEEE 等）の後援を得る

まず1は、大学主催ということである。タイを始めとした東南アジア諸国では、大学が中心となって国際会議を主催することがよく行われるようである。2は、近隣国の大学間の交流が盛んであり、国際会議を開催して学生同士が英語でコミュニケーションする機会を設けているということである。また、大学は企業と密接に連携しており応用分野の研究が盛んである。したがって、学会の専門分野だけでなく応用分野の講演者の招聘も盛んに行われている。3は、大学主催の国際会議がIEEE等の後援を得ている、ということである。

以上の施策により、信頼度の高い学会を大学主導で開催し、学生にも英語でコミュニケーションする場を設けている、ということのようだった。

以上で紹介した大学開催スタイルに倣いAPRIS2018を開催することができればベストであったが、大学主催の国際会議は数年に一度の開催で、今回は残念ながらタイミングが合わなかった。そのため、国際会議を「ゼロからつくる」こととなった。

APRIS2018の運営について、日本側はSIGEMBのコアメンバ（運営委員）の教員が行い、タイ側のメンバはNETHの社員と、NETHと協力関係にあるPSUの教員を中心とした数名で行うこととなった。NETHの社員およびPSUの教員が、日本側メンバとの窓口となり、開催現地側の企画準備

をしてくださることとなった。

SIGEMBのコアメンバが大枠の案を作り、本会としてのシンポジウム開催申請を行ったのが2018年3月であった。

作りたかったもの

APRIS2018で作りたかったものは何なのか。APRIS2018には多くの人たちがかかわった。そのため、「なぜ開催するのか？開催の目的は何か？」に対する答えは1つではないと思われる。また、国際会議は運営メンバだけではなく、一般の参加者が何らかのメリットを感じて投稿し、参加してくれてこそ、成立するものである。

しかしながら、少なくとも企画の段階でSIGEMBメンバが共有していたのは以下の点である。

「日本人学生が外国において安心して英語で発表・議論できる場をつくりたい」

いわゆるトップカンファレンスに、学生が頑張って研究して出た成果を論文にまとめて投稿し、厳しい査読をくぐり抜けて採択ともなれば、大変名誉なことである。学生を預かる教員としては、何とか予算の都合をつけて送り出すことができる。しかしながら、トップカンファレンスに行ける学生は全体からするとごく一部である。その一方、現状を鑑みると、多くの学生に外国経験を広く積んでもらうことは、学生本人の将来の可能性を広げるために、非常に重要なことである。

ちょうどよい国際会議（信頼できて、採択されやすい）があればよいが、分野によっては必ずしも都合の良いものがあるとは限らない。さらに、いわゆる「国際ハゲタカ学会」の問題がある。そのような国際会議において学生に発表させることが良い経験になるか、というと大いに疑問である。

そのため、「日本人学生にとって良い投稿先となる国際会議を自分らの手で作る」、ということが必要である、というのがSIGEMBコアメンバの共通認識であった。

運営側として APRIS2018 をどのような国際会議と位置付けるか、ということについてまずは日本側メンバ間の意識を合わせる必要があった。たとえば、既存の国際会議中に開催するワークショップを企画する方法もあった。しかし、組込み分野は専門分野が多岐にわたるため、適切に国際会議テーマを選ぶことが困難な問題があった。また、これまで開催実績のある国際会議の運営を引き継いで行うのであれば、ローカライズのための改善等は考える必要があるものの、少なくとも雛型はあり実績があるので、やることは明確である。しかし APRIS2018 においては、初回であったために、企画メンバの間で意識共有も容易ではなかった。

また、予算を立てる都合上、投稿数の見積もり、参加人数の見積もりが立つような、内容・企画・日程にする必要があった。

以上の検討の結果、国際会議部分は「(日本の)情報処理学会電子図書館での出版」, 「日本人+タイ人からなる国際プログラム委員会での査読」といった大方針をまず立てて、タイと日本の間で合意を取りながら進めることとなった。

タイと日本での合同運営

一般的な国際会議の運営において、いわゆる「国際会議のグローバル・スタンダード」に従い、目的が明確であれば各国の事情を考慮する必要はないかもしれない。しかし、今回は運営が日本とタイであるため、双方 Win-Win の関係を築くことが必要であり、タイ側のメンバの事情をよく考慮した上で動く必要があった。

たとえば、参加登録費の金額を決める際にどの程度の価格にすれば多くのタイ人学生が参加できるのか、というのはタイ側に判断していただく必要があった。また、広報する段階で、どうしたら日本とタイの双方から多く投稿してもらえるのか、まったく手探りであった。また、タイと日本の PC 委員の

間で、査読の方法についてよく調整する必要があった。参加者の募集についても、現地 PSU (ハジャイ・キャンパスおよびプーケット・キャンパス) の学生に数多く参加してもらうために PSU の先生方に協力していただく必要があった。

ずいぶん後になってから認識したのだが、日本では大学教員は学会活動に関して比較的自由的な裁量で動けるのに対し、タイの大学の教員は、学会運営に携わる際の大学からの許可が日本よりも厳格である、と感じた。また、学会開催に対する日本側メンバの目的はタイ側に伝えるように尽力したが、お互いの目的を共有することが容易ではなかったように思われる。そのため、お互いの文化を知っている人の存在が非常に重要であった。たとえば WIP (Work-In-Progress) カテゴリ (査読あり) での発表に関して、当初、日本側メンバはポスター発表の形態を考えていた。このカテゴリにタイの学生が多く投稿してくれたのだが、タイ側の大学の学部卒業要件には査読付きの口頭発表が必要であり、タイ側では口頭発表を想定していたようであった。そのため、急遽口頭発表とポスター発表を選択制にするなどした。これは、タイの学生にとっての参加するメリットを事前に把握できていなかった一例であり、2 国間での意思疎通の難しさを示している。

これらのコミュニケーションの困難さの解決手段



図-1 APRIS2018 会場の Prince of Songkla University プーケット・キャンパスにて

は何だったかというところ、月並みな答えかもしれないが、「直接会う機会を作ったこと」「SNS等を通じたコミュニケーション」「音声通話」であった。

2018年2月にはSIGEMBの多くのメンバがタイPSUとNETHを訪問した。また、6月末にはSIGEMBの研究会における招待講演として、PSUのDr. Nattha Jindapetchをお呼びした。さらに7月には、SIGEMBメンバが一度会場を下見し、具体的な会場の選定や開催計画などを行った。

SNSは大変強力なツールであった。音声通話も含めて、コミュニケーションが活性化したことは間違いない。こうした新しい試みを立ち上げるためにはFace-To-Faceの対話が一番効果的であるということ間違いはない。しかしながら、SNSやインターネット経由の音声通話は、直接会うのが難しい状況を補完してくれるものであった。

APRIS2018を終えて

こうしたさまざまな運営の苦労はあったものの、

APRIS2018は大変盛況であった。参加者のアンケートも、全体評価の平均が3点満点中2.42点であり、おおむね好評であった(3:Excellent, 2:Good, 1:Fair, 0:Poor)。大変喜ばしいことに、今年もタイ・バンコク付近にてAPRIS2019の開催が予定されている。さらに今後は東南アジア諸国での開催が構想されており、多くの日本人学生にとっても良い研究発表と国際交流の場になることが期待される。

私自身は、新しい国際会議をゼロから作る体験ができただけで大満足であり、加えてAPRIS2018の開催を通じてタイの大学教員・技術者・学生の皆さんと多くのつながりを持てたことが収穫である。今もSNSでのコミュニケーションを続けている。読者の皆さんも国際会議の立ち上げの機会があれば、ぜひ手を挙げていただきたい。

(2019年3月31日受付)

大川 猛 (正会員) ohkawa@is.utsunomiya-u.ac.jp

2003年東北大学大学院工学研究科電子工学専攻博士課程修了、博士(工学)。約1年間のポスドクの後、2004年産業技術総合研究所研究員、2009年(株)トプスシステムズ、2011年宇都宮大学大学院工学研究科情報システム科学専攻助教、2019年から東海大学情報通信学部准教授。電子情報通信学会、日本ロボット学会、IEEE、ACM各会員。

